

熱い思いや経験から得たことを言葉に...

健全育成主張大会・標語表彰



▲ 発表者と標語入賞者のみなさん

第26回只見町青少年健全育成主張大会・健全育成標語入賞者表彰式が、1月28日に季の郷湯ら里で行われ、将来の夢や希望、震災や水害を経験しての考えなど、発表者の気持ちが進められた熱い言葉に感動の拍手が送られました。

標語入賞作品

(敬称略)

部門	賞名	標語	所属	氏名
小学生の部	優秀賞	あいさつと 感謝の言葉で 人つなぎ	明和小学校6年	菊地美結
	佳作	学習が 明日への階段 つなぐんだ	只見小学校6年	五十嵐夏希
	佳作	只見町 笑顔で復興 がんばろう	朝日小学校6年	黒目真子
	佳作	あいさつで 絆をつなぐ 地域愛	明和小学校6年	角田妃菜子
中学生の部	優秀賞	積みかさね 夢に近づく 第一歩	只見中学校3年	馬場光弘
	佳作	仕事する 父母の背中に ありがとう	只見中学校1年	齋藤咲希
	佳作	あたたかい ごはんとあいじょう ありがとう	只見中学校2年	新國優
	佳作	力つけ 夢を叶える この町で	只見中学校3年	飯塚奈央
高校生の部	優秀賞	ボランティア 地元のできる 恩返し	只見高等学校3年	佐藤賢人
	佳作	あいさつと 笑顔でつながる 地域の輪	只見高等学校2年	星花那美
	佳作	流れない 強い絆は いつまでも	只見高等学校3年	山井雅美
	佳作	災害に 負けない強さを 持つ只見	只見高等学校3年	酒井なつみ
一般の部	優秀賞	前向きに 耐え抜く只見 つながる手	只見・沖	菅家紀子
	佳作	見直そう みんなで出来る ボランティア	梁 取	山内美代子
	佳作	「元気かや」 町民にかけると 笑顔の目	蒲 生	田中ケイ子
	佳作	少子化に 忘れちゃいけない 半分こ	福 井	渡部ゆき子

主張大会では、小学生3名、中学生3名、高校生2名が、今思っていることを感じていること、体験したことなどを心を込めて発表しました。その熱い思いが約70名の来場者に伝わり、発表者の言葉に感動されていました。

続いて行われた標語入賞者表彰式では、青少年健全育成町民会議会長の目黒町長が、出席された入賞者一人一人に賞状と記念品を贈りました。標語には、247点の応募があり、どれもすばらしいものでした。

主張大会での発表内容と、標語の入賞作品を紹介します。ぜひ、ご覧いただき、健全育成の活動にご理解とご協力をお願いいたします。本事業は、町民の皆さんからの協賛金により実施されています。

「絆」について考える



只見小学校6年

新 陸くん
にっ くに りく

「絆」と聞いて皆さんはどのようなことを思い浮かべますか。去年起こった大震災や豪雨災害からみんなが協力して復興へ向かって行動する姿を思い浮かべる人がほとんどでしょう。でも、ぼくは少し違います。ぼくが真っ先に思い浮かべるのは、学級の合い言葉としての「絆」です。

ぼく達、只見小学校の六年生は、五年生の時から学級の合い言葉を「絆」にして十四人の心をつなげようと努力してきました。それを提案したのは、ぼくです。それは、保育所からずっと一緒にの十四人と、本当に心を合わせてみたいと思ったからです。

ぼくの友達は、みんな個性的です。例えば自由ほん放でゆかいな友達。一つのことにごだわって集中力を発揮する研究好きの友達。いつものんびりマイペースな友達。一人一人全く違う個性であふれています。そんな友達のこと、ぼくは大好きです。でも、それぞれの性格が違いすぎて、トラブルに

なることも少なくありません。ところが、高学年になったので、いろいろな行事でも責任を果たさなければならなくなり、自分達がけんかをしている場合ではないと思えました。だから、「絆」を合い言葉にして協力し合っていけば、只見小学校の代表としてふさわしい高学年になれると考えたのです。

ところが、ぼくが考えたように簡単には「絆」は深まっていきませんでした。ぼくは、「絆」を深めるために一番大切なのは、心一つにして行動することだと思えます。ですが、小さい頃からずっと一緒に兄弟みたいな関係のぼく達には、相手のことを思いやるという気持ちがありませんでした。

だから、ついついちよつとしたことで相手に対して乱暴で激しい言葉を使ってしまうたり、取っ組み合いのけんかをしてしまったりということが、以前のようにずっと続いてしまい、なかなか心を一つにすることができませんで

した。

大きく変わったのは、五年生の学習発表会の時です。ぼく達は、学年発表の演技を、「絆」を深めて成功させるために、組み体操とダブルダッチ、そしてハンドベルでの演奏と決めました。どの演技も、心を合わせて取り組まなければ絶対に成功しないものだからです。練習の時には、ふざけてしまう人がいて言い合いになることが多くありました。その度に「絆」という言葉が、ぼくの頭に浮かび、「やっぱり、ぼく達には絆を深めるのは無理なのかなあ。」とさびしい気持ちになりました。でも、発表会の日が近づいてくるにつれ、みんなの本気が伝わってくるようになってきました。本番は、一つ一つの演技を、ていねいに心を合わせて取り組み、大成功させることができました。それは、今までに味わったことがない達成感でした。十四人の心が一つになるという感覚を初めて体験し、感動しました。

それからぼく達は、六年生になった時にも「もつと絆を深めたい」と思い、また、合い言葉を「絆」にして、いろいろな行事に取り組んできました。体育交歓会のリレーでは、絶対に男子も女子も優勝するという目標を立て、達成することができました。また、今年度の学習発表会では、初めて只見町の歴史劇に挑戦し、大成功させることができました。六年生は、もともとゆ快地楽しいメンバーですが、本当にあった劇なので、真剣にやらないと来てくださったお客さんを感動させることはで

きないと話し合い、みんなの気持ちを込めて真面目に取り組みました。ぼくは、演技に入り込み、本当に泣きそうになっっている友達を見て、「心を一つにすればこんなすごいことが、ぼく達にもできるんだ。」と驚きました。見ていた家の人達だけでなく、先生や地域の方々にもたくさんほめていただき、本当にうれしい経験でした。これも、同じ目的の仲間が、心を一つにして一生懸命に取り組んだからできたんだなあと思えました。

心を一つにすれば「絆」が深まっていく経験は、他にもありました。それは、去年の豪雨の時です。ぼくが住んでいるのは只見の沖地区です。沖地区は、只見川と伊南川の合流地点にあり、大きな水害にあいました。そのため、ぼくの家は二階の床まで水につかってしまいました。ぼく達家族は、すぐに只見小学校へ避難したのでみんな無事でしたが、家はそのままでは住めなくなっていました。次の日から、お母さんとおばあちゃんの家を片づけたくたくたになって避難所に帰ってきました。ぼくも行こうとしたら、

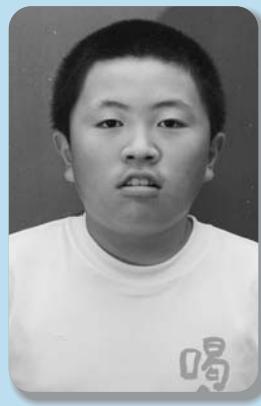
「ひどい状態だからだめ。」を言われました。きつと、ぼくの事を思っ言ってくれたんだと思います。でも、水がある程度引いた日に、ぼくも手伝いに行きました。泥は重く、すくっても流れ落ちてしまい、大変でした。その大変な作業には、たくさんの人達が手伝いに来てくれていることを知りました。みんな、「疲れた」とも



言わず、心を一つにして、もくもくとぼくの家をきれいにしてくれていました。おかげでぼくの家の中は、きれいにかたづき、ぼく達家族は、元気をもらいました。手伝ってくれたみなさんには、とても感謝しています。

きつと大震災で大変な思いをした人達も、同じように心を一つにしながら復興に向かって活動していく中で、「絆」を感じながら元気になっていったのだ

あの日から



朝日小学校6年

目黒裕大くん

七月二十九日。ぼくの家は全壊した。小学校での離任式が終わり、ぼくは、いつものように家で寝ていた。今週は、ずつと雨が降り続いていた。そして、午後四時。お父さんが、「本家に逃げろ。」と、言いに戻ってきた。ぼくの家は横にある川の水量がものすごく増え、道路に水があがっていたのであった。本家に逃げると、本家の家の横にある花だんにも川のように水が流れていたのであった。三十分くらい本家にいて、

ろうなあと思います。このように、ぼくは、身近なところで「絆」について考えることがたくさんありました。これから先も、きつと「絆」が必要になることがたくさんあると思います。その時には、この二年間で学んだ、心を一つにして行動した経験の思い出しながら、いろいろなことを乗り越えていきたいと思つていきます。

ぼくはずつと外を見ていた。雨がやみ、じいちゃんとお母さんは家にもどつた。お母さんは、断水になるからといって、家にある鍋に水を入れていた。じいちゃん、川の様子を見ながら、「川の水が引いたからみんなもどれるぞ。」と、本家に言いに来た。十分ぐらいたつてから、再び外を見てみると、お父さんがものすごいスピードで、車を運転してきた。何かと思つて見てみると、車の後ろを土砂が追いかけるように流

れてきてたのだつた。ぼくは、外に出て山の方を見ると、「バキバキ。ゴロゴロ。」と雷のような音が聞こえた。すると、隣の家のビニールハウスに木と土砂があたつた。おどろきをかくせないままいると、お父さんが、「裏山がくずれるからにげろ。」と言つた。道路を見ると、ドロなどが一メートルぐらいの高さで流れていた。ぼくは、お父さんにおぶわられて佳祐君の家に行つた。そのとき、お父さんに「お母さんはどうしたの。」と尋ねたけれど、答えてくれなかった。そして、佳祐君の家に着き、外を見るとスイカやコイがいっぱい流れていた。布団に入つたが、お母さんや家のことが心配になり、寝られない。すると、消防団の人たちの、「だれかいませんか。」という大きな声が聞こえてきた。それを聞き、佳祐君のばあちゃんが、「荷物まとめろ。」とあせるように言つた。伊南川の水位が危険水位を超えていたようだ。その後、避難をして杉沢に行つた。杉沢に向かう車の中では、家は大丈夫だろうか、お母さんは大丈夫だろうかといういろいろと考えているうちに、足がふるえてきた。

夜中の十二時頃、また強い雨が降つてきた。杉沢から湯ら里までの道が通つたので、湯ら里にみんなで行くことになった。

翌朝、湯ら里からぼくの家の方を見

ると、信じられない光景を目の当たりにした。家が土砂にうまつていたのだ。足がすくんでしまった。ロビーにもどると、お母さんが立つていた。お母さんにどうしていたのか聞くと、鍋に水を入れてみると雷のような音が聞こえたので、迷うことなく田んぼに飛び込んだということだった。本当に助かつてよかつた。ぼくは、一安心した。

さらに翌日の新聞を見ると、ぼくの家と土砂に埋まつた車がのつていた。ぼくは、声が出なかつた。一体ぼくの家はどうなつてしまつたのだろうかと不安な気持ちになつた。

何日かたつて、家にもどつてみると、家の中は、ドロだらけだつた。ぼくの中の真つ白だつた。あの日寝ていたことつ、仏だんにおいてあつた通知票。

次の日から、家の中に入った土砂出しをみんなで始めた。親せきや同級生も手伝いに来てくれた。みんなの気持ちがとてもうれしかった。みんなで汗をかき、協力して作業にあたつた。そのおかげで、三週間くらいで家の中の土砂は片付き、家の前にあつた十メートルぐらいの土砂の山もなくなつた。

ぼくは、改めて思つた。只見町が復興していくためには、只見の人たちが下を向かず上を向いていくこと、笑顔で生活することが大切であると思つた。笑顔は、ため息の何倍もいいことだと思ふ。笑顔でいれば、他の人もうれし気持ちにさせることができる。みんな

ながうれしい気持ちになれば、笑顔が広がる。そんな只見町になってほしいなと思う。

ぼくが、今できることは少ないと思う。でも、笑顔でいることはできる。ぼくが笑顔でいることで、じいちゃんやお父さん、お母さんが安心する。家族みんなが上を向いて過ごすことができる。そんな当たり前の毎日を過ごしていきたい。ぼくが、大人になったら

七月二十九日以前よりもステキな只見町にしていきたい。

十月に入り、ぼくにはもう一つの目標ができた。今までは、プロのスキー選手になることだけであつたが、この水害の経験から地区の安全を守る消防団員にもなりたいと思うようになった。大好きな只見町をよりよくするために、これからも、大人になってからも、笑顔で前向きにがんばっていきたい。

「欠点」から生まれた志



明和小学校6年
飯塚 健太郎くん

『口げんか』
それはぼくが得意とすること。今まで、友達と口げんかをして負けたことはほとんどない。心に浮かんだ気持ちごとんどん頭の中で自分の言葉となり、次から次へと口から出てくる。自分なりに、どうしてこうなったのかを考えながら、自分なりの言い分にとどりつく。そして、こう言い聞かせるのだ。

「ぼくは悪くない」
今思うと、本当にいやなヤツだ。当然、自分から謝ることはほとんどない。

そのせいで、仲直りできなかつたり、また新たなけんかを生み出してしまつたり、そんなことが何度もあつた。しかし、ある日、ふとぼくは思つた。本当にぼくは悪くなつたのか、口げんかで相手を深く傷つけるようなことを言つてしまつてはいないかと。その日から、けんかをしてしまつた時、少しでも自分に悪いところがあつたと気づいたら、すぐに謝るように心がけるようになった。自分が得意としてきた口げんかの途中で、自分から謝

つたり、言い合つていることがバカらしくなつて、相手と笑い合つたりすることが多くなつた。そのおかげか、友達と心の底からけんかをするということはほとんどなくなつた。時々、言い合いになることはあるが、以前と比べたら友達と良い関係を築けていると思う。自分が得意としてきたことは、実は友達関係を悪くさせたり、新たな争いを生んだりしてしまう「欠点」でしかなかった。そう気づいたので、ところがある日、母にこんなことを言われた。

「健太郎、弁護士になつたら。その達者な口が生かせるよ。理屈っぽくて言いつの上手い人には向いてるんじゃない」

たぶん母は、冗談で皮肉を込めて言つたのだと思う。けど、何だかぼくは少しうれしかった。自分の「欠点」が誰かの役に立つ、そんな職業があるのかと、素直に思つたからだ。もしかすると自分に合つているのかもしれない、そう思うと、少しずつ弁護士という職業に興味を持ち始める自分がいた。

弁護士は、実際のそうさや裁判に参加して、被告人・被疑者の弁護をする刑事事件と、生活の中のトラブルの解決を中心に行う民事事件とを取り扱う。どちらも大切な仕事である。

ただ、弁護士は犯罪者側につくというイメージがあり、悪い人の味方につくのかと思うと、少し気が重くなつた。しかし、その考えもすぐに消えてしま

つた。ぼくはある本の一説を思い出したのだ。

「人殺しなんて、本当は誰だつてしたくないんだ。だけど、時として人は逃げ場のない苦悩にとられ、悩み苦しんだあげく、最後の選択として『悪魔のささやき』に耳を傾けてしまう」

このフレーズがぼくの心にひびいた。弁護士は、「悪い人の味方」ではない。この世には本当に悪い人などいないのではないか。悪魔のささやきに耳を傾けてしまつた弱い人を救うことも仕事なのではないか。真実を見極め、弱い立場の人の力になれるよう、言葉で戦う弁護士になりたいと思うようになったのだ。

しかし、「えん罪」といつて、罪のない人の自由をうばつてしまつたり、その人の家庭をほうかいさせてしまつたりする、つまり何も罪のない人が罪をさせられてしまうという悲劇も現実では起こつている。そして、弁護士自身がそれに関与してしまふことがあるかもしれないのだ。つまり、そのような悲劇を生み出さないためにも、弁護士には、真実をしんちように見極め、正確な判断をくだす力が必要と言えらるのだ。

ぼくが、ある時まで欠点だと気づくことのできなかつた「口げんか」のように、「思ひすぎし」などは、弁護士の立場では絶対にあつてはいけない、自分なりの言い分では通用しないのだ。さらに、弁護士には頭の回転の速さや知識、記憶力なども求められる。弁護



▲ 発表者に拍手



標語(高校生の部)優秀賞
「佐藤賢人さん」

士になるためには、今の自分のままで
はほど遠いと実感している。だからと
言ってあきらめるつもりはない。これ
から、中学・高校と頑張つて勉強し、
大学へ進学して、ぜひ弁護士免許をと
りたいと考えている。また、友達と付
き合つていく中でも、自分の行動や言
動に非があつた時には素直に認め、相
手の立場やその場の状況もしっかりと
考えて過ごしていききたいと思う。

夢は大きく、それを達成するための
目標を細かく作り、一つ一つクリアし
ていきたい。「欠点」だと思つていた、
自分の「取り柄」を生かし、自分が頑
張ることでの役に立てる、いつかそ
んな日が来るのを夢見て。

子どもたちの「明日」という希望



只見中学校1年

馬場真樹さん

「明日やればいいか。」

この言葉を私はよく使つてしまひます。
明日なんて、時間さえ経てばやつてく
るし、一日の時間なんてそんなに長く
はないと私は思つています。自分にど
んなことが起きようが、明日があるとい
うこともわかつています。それが自
分の人生の終わりの日であつてもです。

私の知らない国や地域で、また、よ
く知つていると思つていた国でも、子
どもたちが過酷な労働に耐えている地
域があります。私よりもっと年下の子
どもたちが働いている現状です。もし
て、どんなに働いても「子どもだから。」
という理由で、ほんのわずかな賃金し
かももらえません。幼い子どもたちがな
ぜそこまでしなければいけないのか、
私には全くわかりませんでした。
しかしそれには、私たちが想像もつ
かないような理由があつたのです。そ
れは、家族のためなのだそうです。親
を亡くしたりケガをしても経済的援助
を受けられない子どもたちなのです。

生活費や病気になるたときの治療代、

その他さまざまな事情で、貧しさから
逃れようと必死なのです。当然子ども
ですから、特別な知識があるわけでは
ありません。それに、働くために学校
にも行けずに好きなこともできないで
いるのです。もし、今の自分が同じ立
場にいたとしたら、私は何をしている
のだろうと思ひます。家族のために自
分の将来を捨ててしまふ覚悟があるか、
覚悟があつたとしても、家族を支えら
れるようなことができるのか自信があ
りません。とても不安になると思ひま
す。そう考えると、この日本に生まれ、
当たり前のように授業を受け、好きな
ことを思いつきりできて、明日も必ず
平和な日が来ると思つて過ごしている
ことが、とてつもなくすごいことなの
だと感じてしまひます。

そしてもう一つ、この子どもたちを
苦しめている原因があります。それは
内戦や紛争です。今や、「水」を奪い
合う紛争が年間二百件以上も起きてい

るそうです。自分の国の中の争いごと
とで多くの人の命が奪われ、多くのけ
が人も出ます。食料もなくなり、争い
が終わつても大切な人を亡くした悲し
みだけが残ります。大人たちの起こし
た争いにより、子どもたちが苦しんで
いるのです。私たちにとつても他人事
ではないと思ひます。内戦や紛争で弱
つてしまつた国があれば、その国の人
のために援助や支援をしなければなり
ません。そうやって他の国が困つてい
たら、助けることが当然のことだと思
ひます。

今、この平和な日本も助けられる側
になつています。三月十一日の東日本
大震災、台風十三号による豪雨被害な
ど、自然災害により日本は傷ついてい
ます。支援や援助に支えられて、日本
には復興する力があります。でも、貧
しい国にはその力がありません。援助
の手も隔々までは行き届きません。水
までも奪い合う世の中で、支援の手が
足りないのはあたり前だと思ひます。
世界にはいろいろな子どもがいます。
争いを知らない子どもがいます。平和
を知らない子どもがいます。学校に毎
日通う子どもがいます。言葉を知らな
い子どももいます。そんな子どもたち
の中で明日の命も考えている子ども
がいるなんて、信じられないことです
が、今の世界の現実です。だからこそ、
これからの未来をつくる子どもたちの
希望を失つてはならないと思ひます。
子どもたちの「明日」という希望、そ
して平和を求める心を。

世界が汚染される前に



只見中学校2年

吉津千晶さん

「汚染」という言葉を聞いて思い浮かべるのは、今だったら「放射能」という言葉だと思います。三月十一日の大震災以降、テレビのニュースや新聞では、「放射能」が大きく取り上げられています。この言葉を聞かない日はありません。それだけ人間にとつて恐ろしい存在なのだと思います。早く、目に見えない恐怖から抜け出したいと思いますが、残念ながら、そう簡単ではないようです。

しかし、放射能と同じくらい恐ろしいものがあります。それは化学薬品です。化学薬品は、突然変異を引き起こしたり、遺伝子に危険な作用を加えたりすることがあるのです。普段、あまり農業に関わることはない私たちには、殺虫剤や除草剤はなじみのないものです。お店で食品を買うときも、そんなに意識して買ったりしないし、当然のように安全だと思っている部分もあります。どの食べ物も薬品で汚染されています。それが全く使われていないかな

どと、細かいところまで注意して選んでいないと思います。

私は夏休みに『沈黙の春』という本を読みました。著者のレイチェル・カーソンは化学薬品による汚染について、世に訴えています。その後の研究で、レイチェルが記述した内容のすべてが正しいとは言い切れないことがわかったそうです。しかし、日本で環境問題が騒がれる何十年も前から、レイチェルは危機感を持っていたのです。この本で薬品汚染による被害を知り、「絶対に安全である」ということはないのだと感じました。

原発事故も、「絶対に安全だ」という考えがどこかにあつたからこそ起こってしまったのではないのでしょうか。化学薬品も放射能も、その便利さに夢中になり、恐ろしい部分が頭の片隅にあつたにもかかわらず、見えなくなっていたのかもしれない。

『沈黙の春』では、薬品や放射能は「どのように恐ろしい作用があるのか

よくわかっていない道具」と書かれています。現在では、化学薬品も放射能も、私たちの生活とは切っても切り離せないものになっていました。化学薬品はさまざまな場面で使用されていますし、放射能も原子力発電所で電気を作り出すためには、どうしても発生してしまふものです。でも、このまま「よくわかっていない道具」を使い続けていつてもいいのでしょうか。今の日本では、むやみに化学薬品を使ったりすることはありません。でも、放射能はどうでしょうか。日本のいろんな所に点在しています。薬品も核廃棄物も蓄積されていく一方です。便利なものは、その分リスクが生じることは世の常です。今回の福島原発事故のように、取り返しのつかないリスクがあるとわかっていけるのなら、初めから使わないでしょう。最後まで責任を持つて処理することができないのなら、絶対に使つてはいけなと思います。使われないことが無理なら、せめて使う機会を減らすことができないものなのでしょうか。

昨年、私の家にも県民全員を対象にした健康調査の書類が届きました。私たち県民は、これから何十年もの間、定期的に健康チェックをしなければなりません。なんだか、他の国民に観察されているような嫌な気分です。便利な部分だけを見ずに悪い部分もしっかりと見て、もう一度よく考えてみる必要が大切です。便利さの陰には、落とし穴があることを忘れずに、生活していきたいと思えます。

七・二九

只見中学校3年

ば馬場美樹さん



七月二十九日、朝からずっと土砂降りの雨が続いていました。私はこの日、高校の体験入学に行っていました。お昼に体験入学が終わり、合唱練習に参加するため父の車で中学校に向かいました。中学校に向かう途中でも、何カ所も水があふれていました。私の頭にもその日の朝、祖母が言っていたことが頭に浮かびました。祖母は「蒲生は雨に強いから、土砂崩れはねえぞ。」と言っていました。しかし、

中学校に着いたとき、先生に「蒲生、危ないらしいぞ。」と言われ、とてもあせってしまいました。

それからが大変でした。学校から家になかなか帰れず、約四時間後に帰ることができました。父の車に、蒲生方面の生徒を五人乗せて帰ったのですが、普段通っている道はすでに通行できず、明和の松坂峠を越えて蒲生まで来ました。私たちが通った滝ダムのトンネルも大きな打撃を受けてしまいました。帰るのがもう少し遅かったら私たちは家に帰ることができない状態になっていたと思います。そして蒲生に着いたのはいいのですが、家が目の前にあるのに、家の前の道路は通行止めになっていました。目の前には、山の堀から流れてくる水が川のように流れており、そこで初めて恐怖を感じました。しかし私たちは、その川のような流れの中をびしょ濡れになりながら家に入りました。水の勢いがおさまらないので、八木沢と入叶津方面の三人は家に帰ることもできませんでした。三人は私の家に泊まりました。

家から外を見ていると、今度は川の水がみるみるうちに畑や田んぼ、家までもを飲み込んでいくのを見えました。川は氾濫していろんなものがすごい勢いで流れていきました。そして予想していた、停電と断水になってしまいました。その夜は、電気がないのでろうそくをともしたり、ランタンを点けたりして暗闇の恐怖から何とか逃れたい

と思いました。その夜は、水の力の恐ろしさについて、口々に話しました。しかし次の日、水の恐ろしさと同じくらいの恐怖を感じたのは、水の引いたところの光景が、生まれ育った蒲生ではないように感じたことです。どこを見てもゴミや土砂だらけで、震災後のテレビで放映された光景が、目の前に突然現れたようでした。あまりにひどい姿に私は心が折れそうでした。「一体これからどうなってしまうのだろう。」

という不安と、嵐の後の異常なまでの静けさ、ライフラインを絶たれてしまった恐怖が、いつべんに押し寄せて、なんだか力が出ません。今まで味わったことのない感情でした。黙っていると、涙があふれ出してきました。誰かが呆然とこの光景を見ているのだろうかと思っていたら、人々の声が聞こえてきて、片付け作業をしている人が大勢いました。蒲生の人は強いなあと思いました。ライフラインが途絶えた生活は一週間続きました。それまでの間、自衛隊のヘリで輸送されてくる配給品をもらって生活です。つらいと感じることもありましたが、震災で被害に遭われた方は、この何十倍もつらい経験をしているのだろうと思いを慢しました。

水害のあった日から約一週間後、水道・電気が使えるようになりました。電気がついた瞬間は、まるで初めて電気がついたかのように家族中で喜びました。普段何気なく使っているライフ

ラインが、こんなにも重要で、人間の生活に欠かせないものだとは考えてもみませんでした。

この水害でいろんな思い・感情が、次から次へと襲ってきました。恐怖・不安・もどかしさ・そして安堵感、忘れたくても忘れられない経験です。今もなお爪あととは残っています。元々風景以上にきれいな蒲生にするために、私にできることがあれば、積極的に取り組みたいと思います。

国際化のなかの日本語

只見高等学校2年

菅 家 祐 有 奈 さん



日本には、日本語という文化があります。そして近年、外来語の普及によって急速に増加したカタカナも、文化の一つとして日常的に用いられています。カタカナは会話の中で使いやすく、国際化する日本で普及することは当然のことですが、その中で元々の日本語を浸食している言葉があります。日本人ならば尊重すべき言語をないがしろにしている現状は、由々しき問題だと私は考えます。

古くから使われてきた日本語。漢字は、基本的に中国から入ってきました。もちろん国産の漢字もその中にあり、長い時間をかけて文化となり、それらは今日、海外から高く評価されています。ですが、カタカナは決してそうとは言いきれません。今、私たちの生活の中には、間違ったカタカナ語、いわゆる日本で独自に作られた、和製英語というものが多く存在しています。例として挙げるならば、「スマート」「メイク」といった言葉があります。スマートは、しばしば体格を表現する言葉として使われますが、本来の意味は、賢いという意味を持つ言葉です。メイクは、メイクアップという言葉省略した和製英語です。前者は本来の意味を学ぶうえで障がいとなり、後者は英語圏では通じません。これらの影響を受けてしまうと、英語を学ぶ際に大きな壁となり、本来の意味である日本語が使われなくなってしまうのです。改善方法の一つとして挙げられるのは、小学校での英語の時間を増やし、

今よりも学習内容を濃くするという方法があります。子ども時代から正しい言葉を活用するようになれば、間違ったカタカナ語の使われ方はなくなるのではないのでしょうか。小学校で英語を学ぶことについては賛否両論あります。

子どものうちは正しい日本語をしっかり学び、その後で英語を学んだ方がいいのだという意見も存在します。しかし、あえて子どものうちに正しい知識として正しい言語を学ぶことも有効なことではないでしょうか。そうすることで、日本語も今までとは違った視点でしっかりと学ぶことができ、現在のように、間違ったカタカナ語を覚えてしまう機会は減ることでしょう。つ

まり世界に誇れる文化である日本語を守ることもでき、現在ように間違った国際化の道を進むこともなくなるので

国際化を進めていった中で、日本は多くのものを得ていく一方、失つていったものも多くありました。それは私たちの身近なものも例外ではありません。時代と人が変わるの世の常ですが、そのすべてを変えてしまえば、特色というものが消えてしまいます。新しいものや新しい考えを取り込んでいくのは自由ですが、日本人ならまず日本語を尊重し、日本人の特色を受け継いでいくというの必要なことではないでしょうか。

むこともできます。

しかし、インターネットには便利な面だけではなく、悪い面も存在します。それは「世界中のだれでも」使うことができるという点です。前の長所でも挙げたように、電子掲示板やホームページで自分の持っている情報を簡単に発信することができます。「世界中のだれでも」見ることができるといふことは、言い換えれば「世界中のだれが見ているかわからない」ということにもなります。また、一度流した情報は、それを見た人から人へ瞬く間に広がってしまうため、例えばそれが間違った情報でもそれが広まってしまい、混乱してしまうという例もあります。東日本



インターネット社会の中で

只見高等学校1年

渡部夏芽さん

インターネットの長所は、まず、早い情報の伝達や多くの人との意見交換・交流ができることです。例えば、電子メールを使えば遠くにいなくてもすぐに連絡をとることができます。また、電子掲示板や自分のホームページ・ブログ

などに情報を書き込めば、インターネットのつながっている世界中に情報を発信することができます。チャットを使えば、画面上でリアルタイムで相手と会話をすることができます。オンラインゲームでは仲間との対戦や交流を楽し

むこともできます。しかし、インターネットには便利な面だけではなく、悪い面も存在します。それは「世界中のだれでも」使うことができるという点です。前の長所でも挙げたように、電子掲示板やホームページで自分の持っている情報を簡単に発信することができます。「世界中のだれでも」見ることができるといふことは、言い換えれば「世界中のだれが見ているかわからない」ということにもなります。また、一度流した情報は、それを見た人から人へ瞬く間に広がってしまうため、例えばそれが間違った情報でもそれが広まってしまい、混乱してしまうという例もあります。東日本大震災の時にも、放射線に対する誤った情報が電子掲示板で出回っているという報道がありました。見えないものへの恐怖。ただでさえ恐ろしいものなのに、さも正しいものであるかのように広まった情報によって、さらなる恐怖心がおおられてしまいました。また電子掲示板やチャットなどでは、顔が見えないために「いじめ」が発生したり、犯罪に巻き込まれたりという事例が相変わらず絶えません。

これらをふまえて、私たちが今のインターネット社会の中を生きていくためには、見たり聞いたりした情報を即座に判断するのではなく、自分の目や耳で本当に正しい情報なのかを再確認すること、「世界中のだれに見られているかわからない」という意識を常に持ち、自分の発信する情報に責任を持

つことが必要だと思います。インターネット社会はますます進んでいきます。NTTドコモのホームページにはこんな動画がありました。少しだけこちらをご覧ください。(ムービーをスクリーンに投影)

このように十年後には、世界各国の方々とまるで隣で話をしていくかのような空間を共有できる世の中になつていくかも知れません。しかし、このような社会は「空間を共有する人たちがみんないい人」であることが前提とされる社会です。人と人とのつながりはそんなに簡単に成立するものでもありません。このような時代にこそ、私たちはしっかりと情報を判断する能力が求められるのです。



▲ 賞状と記念品を受け取る渡部夏芽さん